

■北海道大（2020年リーグ準優勝）

東京五輪最終日の8月8日午前、陸上競技最終種目のマラソン男子が、札幌市内で行われた。応援自粛の呼びかけにもかかわらず、勝負所の北大構内を縦断する区間では選手たちに盛んな声援が送られた。そして、競技の熱気も覚めやらない午後1時半、マラソンコースとなった北24条通に隣接する北海道大北24条グラウンドでアメフト部の練習が始まった。

昨季、ライバルの北海学園大に接戦で敗れて連覇を逃した北海道大。新入生10人を加えて選手46人、スタッフ19人の最大の目標は全道王者の奪還と、今年は地元開催となるパインボウルで東北代表を下し、甲子園ボウル切符をかけて関東代表と戦うことだ。

練習開始のハドル。彌永貫至主将（4年、東京・桐朋高）が「試合まで一カ月もない。今年のスローガンは執念。もう一步成長する執念、もう一步足をかく執念を持って練習しよう」と檄を飛ばしてグラウンドに散った。札幌の連続真夏日は途切れたものの、この日も最高気温は29.7度。アップをするだけでみるみる汗がほとばしる。こまめに給水を行いながらの練習だ。

ポジション別練習が始まった。1年生から先発を続けるQB茨木大輔（3年、兵庫・六甲学院高）がRBとハンドオフのタイミングを入念にチェックする。WR陣はダウンフィールドブロックの確認だ。守備チームはひとときわ気合がこもる。LB陣はOLのブロックを外してタックルに移る動きを繰り返して確認し、DLは大型ダミーを使い破壊力充分のラッシュに磨きをかけた。みるまに予定の40分が過ぎた。

コロナ禍の影響で今季も春季オープン戦が行えず、東北大と合同練習を予定していた仙台遠征や、関東に出向いて同じ国立大と手合わせする強化合宿もキャンセルされた。コロナウイルスの影響は他校も同じだが、実戦不足は悩みの種だ。そんな不安を吹き飛ばそうとばかりに、DBとLBを付けたパス練習は真剣勝負。DBがインターセプトを決めると「ナイス」と大きな声が響いた。

2時間半の練習を終えて彌永主将は「ポジション別練習で個人の練度を高めている。1年生の中にも経験者があり、先発の可能性もある」と総合力アップを強調。「今後はより実戦に近づけた練習を行いたい」と開幕を見据えた。



ダミーを使ってラッシュを強化するDLの選手たち